2021年度　視聴覚教育メディア論B　歴史資料館見学

明治学院の歴史的建造物に学ぶ

1901-1908年頃カ　左から現記念館、井深梶之助総理邸、ミラー記念講堂、サンダム館

「明治学院の歴史的建造物に学ぶ」ためのキーワード

□「文化財」としての歴史的建造物
□「生きて使われている建物」としての歴史的建造物
□「アイデンティティの象徴」としての歴史的建造物

何故、私たちは
「明治学院の歴史的建造物」に学ぶのか

■それぞれの建造物という「個」の変遷という時間軸、明治学院白金キャンパスという「キャンパス(全体)」の変遷という時間軸のどちらからみても、欠くことのできない建造物。その時間軸の中に、現在、私たちはおかれていることを知る。

■これまで先人たちがこれらの建造物を守り続けてきた思いを馳せて欲しい。そして、この守り続けてきた思いを、次の世代に引き継ぐ役割を託されているのは今の私たちであることを知る。

■そこには、人の営みが紡ぎ出す物語もあることを知る。

「生きて使われている建物」としての歴史的建造物

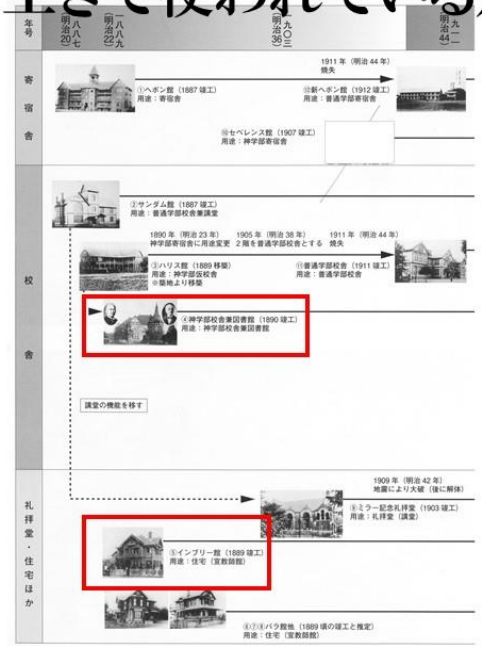
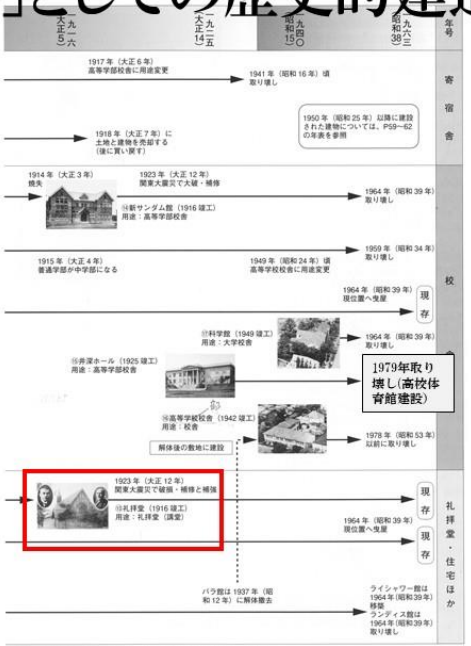
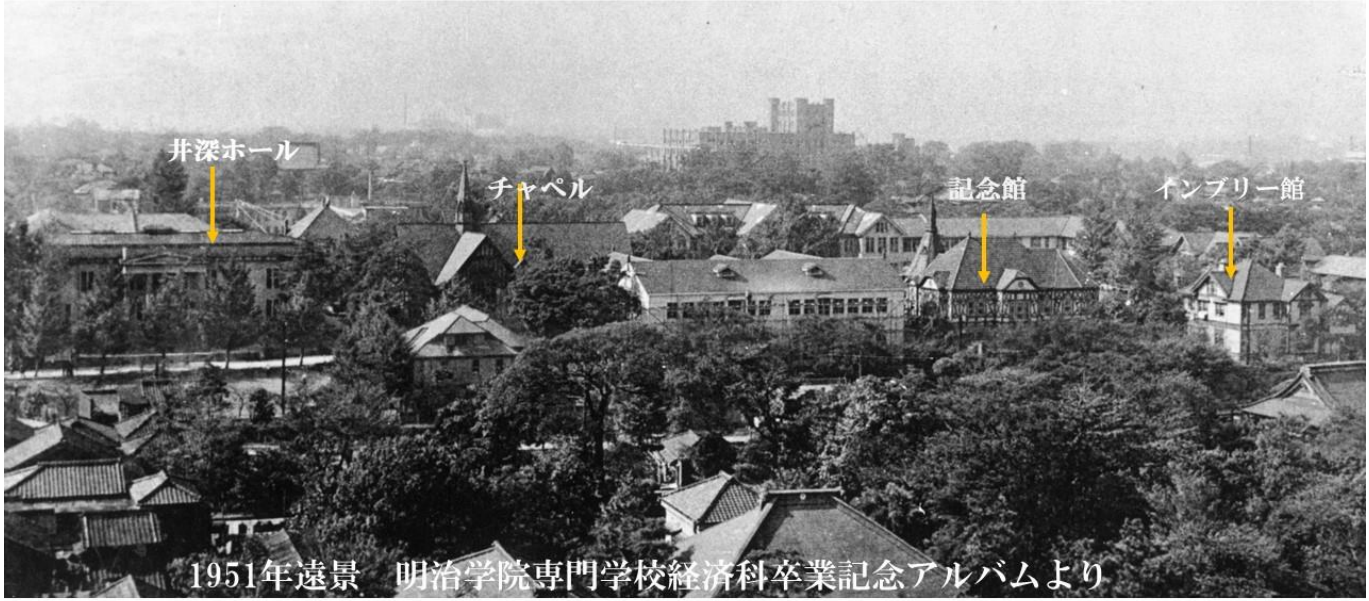


表2―2　白金キャンパス創設時から昭和初期までの主要建造物変遷年表



（建物名称の前に記述した番号は図2―1～5の配置図に対応している）

歴史的建造物と都市景観

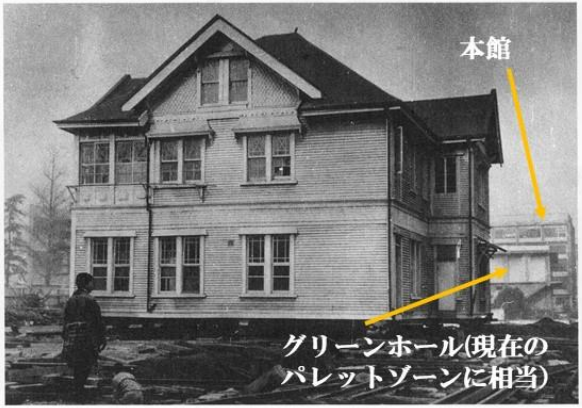


1951年遠景　明治学院専門学校経済科卒業記念アルバムより

歴史的建造物と都市景観

■インブリー館・記念館曳き屋

1964～66年　国道一号線、桜田通りの拡幅に伴って曳き屋工事が行われた。



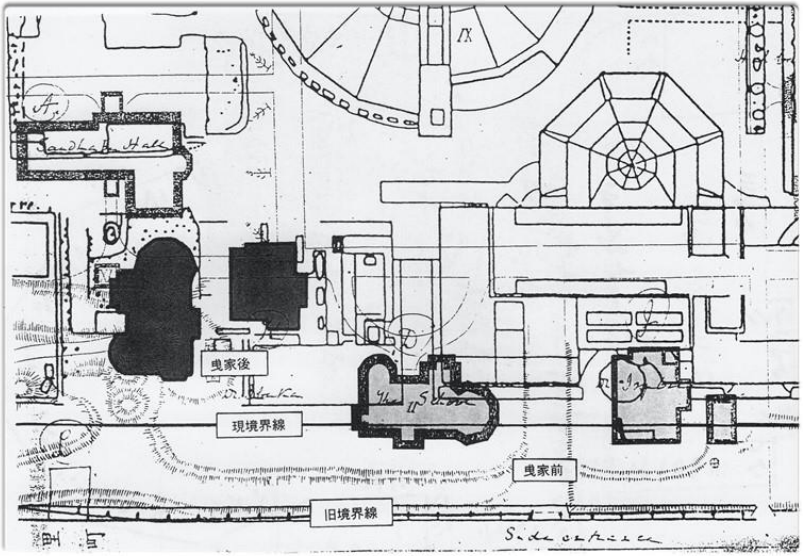
38　曳家工事（1964年）

明治学院旧宣教師館(インブリー館)建物調査報告書　1995

明治学院歴史資料館所蔵

歴史的建造物と都市景観

■記念館・インブリー館の曳き屋　現･旧位置重ね図



1890年頃の明治学院構内図と1993年頃の明治学院構内図を重ねたもの

出典:明治学院旧宣教師館(インブリー館)建物調査報告書　1995

歴史的建造物と都市景観

■白金再開発のコンセプト　内井昭蔵

白金再開発1986年に計画がスタート、2003年に完了。
グランドデザインを担当したのが、内井昭蔵。

生活空間としての大学
**　　－広場の大学。**
都市化されオープン化された大学
**　　―回廊の大学。**
自然環境を最大限生かした大学
**　　―森の大学。**

**　モンテチェロやヴァージニア大学は個人が集団の中で学ぶ場は如何にあるべきかを示す理想的な空間構成をもっており、キリスト教精神に基づき、自由と独立という人間の基本思想を追求する明治学院大学にこれらの理念を具現化した」**

歴史的建造物と都市景観

■白金再開発マスタープラン　東立面図

図１－４　マスタープラン立面図

出典:明治学院旧宣教師館(インブリー館)建物調査報告書　1995年

歴史的建造物と都市景観

1995年～1997年頃の撮影。インブリー館保存修理期間中
インブリー館全体が覆われている。

歴史的建造物と都市景観

出典：東京都港区指定有形文化財明治学院礼拝堂保存修理工事報告書　2008

インブリー館(明治学院旧宣教師館)

■古写真～ガラス乾板に見るインブリー館

柱の一部が炭化している様子が分かる。

明治学院歴史資料館所蔵　ガラス乾板

インブリー館(明治学院旧宣教師館)

■国の重要文化財として指定された理由

明治学院インブリー館は、同学の白金キャンパスの南東部に建つ。木造、2階建ての建物で、宣教師住宅として明治22年頃に建てられたことが関係資料等から判明する。大正11年まで宣教師住宅として用いられ、その後執務室。関係者の住宅として使われていたが、平成７～９年度にかけて保存修理工事が行われ、現在は同窓会等によって活用されている。明治期に来日した外国人宣教師用の洋風住宅の最初期の事例として、我が国にとって価値が高い。

（指定基準＝歴史的価値が高い）

インブリー館(明治学院旧宣教師館)

■インブリー館住人のインブリー博士夫妻

インブリー博士夫妻の写真の撮られた年代ですが、撮影日を示す写真の裏書やメモもないので、正確なところは不明です。推測が可能なのは、1909年にインブリー先生を写した写真があり、それと比較すると10歳は年齢を重ねたように見えます。

写真ではインブリー夫人エリザベスが手に花を持っていることから、何かの記念日と思われ、1919年にインブリー博士が神学部教授を退任した時又は1922年に夫妻が本国に帰国しますが、その時に撮ったものではないかと思われます。

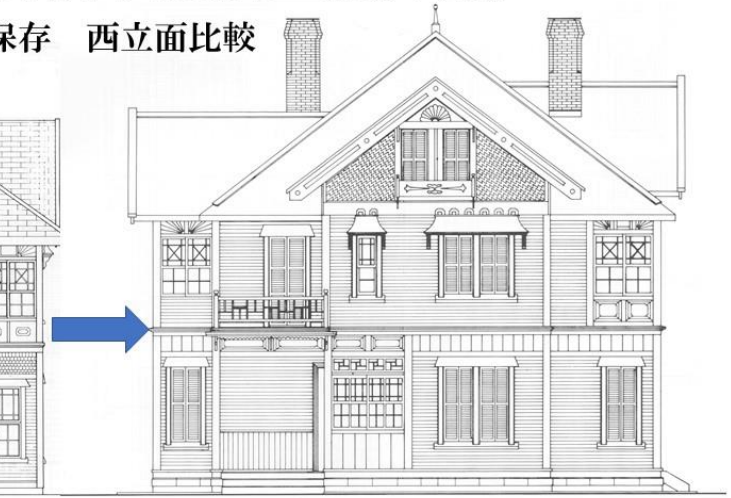
年令的には二人とも1845年生まれですので、74歳-76歳に相当します。

結論的には撮影年代は、「1920年頃」で間違いないと思います。(写真所蔵・画像提供、解説:中島耕二)

インブリー館(明治学院旧宣教師館)

■インブリー館の修復保存　西立面比較

保存修理工事前　出典:明治学院旧宣教師館(インブリー館)建物調査報告書　1995年

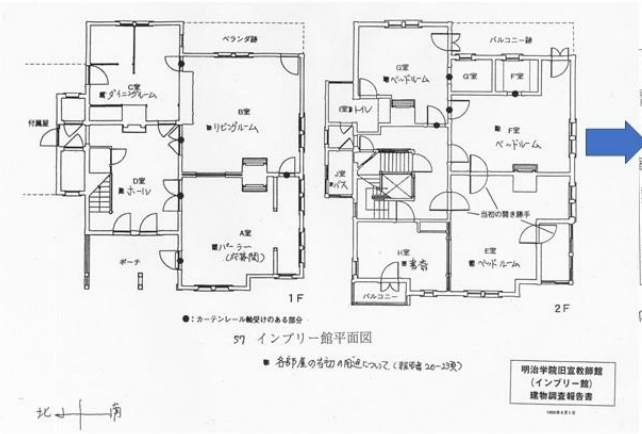


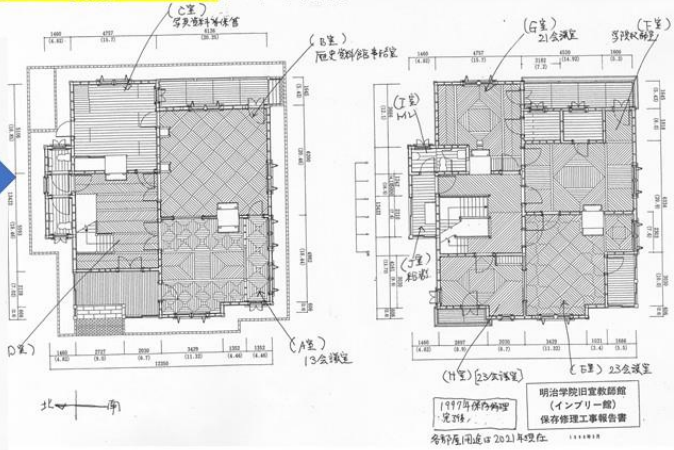
保存修理工事後　出典:明治学院旧宣教師館(インブリー館)報告書保存修理工事報告書　1998年

インブリー館(明治学院旧宣教師館)

■人がいて、生きた空間として使われ続けていた

「常に、そこに人がいて使い続けるという場所だった」高村功一
「死んだ建物ではなく生きた建物として利用していく」島崎義治





インブリー館(明治学院旧宣教師館)

1階:13会議室
漆喰壁の色が
白色

現13会議室にて:
昭和初期の教員
たち　左から小
泉治、石橋近三、
笹尾粂太郎、都
留仙次、中山昌
樹、村上治　(掲
額写真は田川大
吉郎)

2階会議室
上:23会議室
下:24会議室
漆喰壁の色が
黄色

明治学院礼拝堂(チャペル)

■古写真に見る明治学院礼拝堂

竣工間もないころの礼拝堂　北東方向から臨む

竣工間もないころの礼拝堂　内部

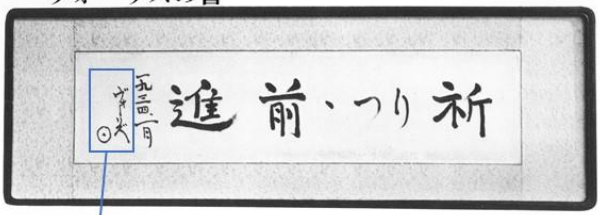
→ メイソン・ハムリン・オルガンが設置されている。

明治学院礼拝堂(チャペル)

■明治学院礼拝堂設計者　ウィリアム・メレル・ヴォーリズ

1919年6月3日
一柳満喜子とヴォーリズ　結婚式
於:明治学院礼拝堂

ヴォーリズの書



[提供：(学)近江兄弟社]

「丸を描いてその中心に点を打ち、近江八幡は世界の中心であるとうい、彼の決意とも言うべき世界観を示した。」

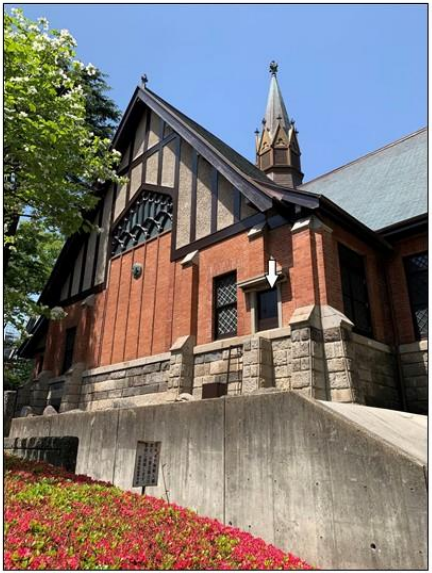
（「写真集　日本人を越えたニホンジ人　メレル･ヴォーリズ」1998年　びわ湖放送株会社　より転載）

明治学院礼拝堂(チャペル)

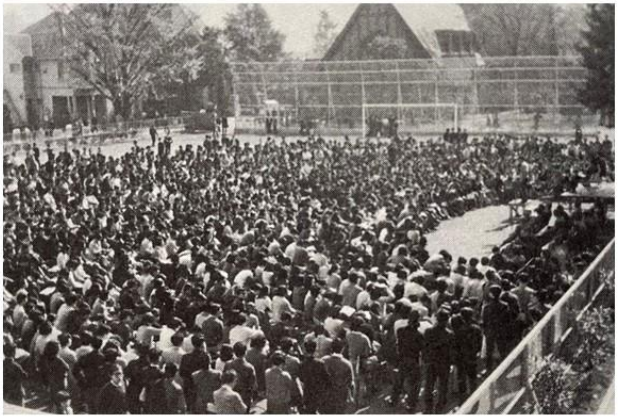
■戦時下に向かう中で、国家体制とキリスト教主義学校の「接合」

御真影奉戴

1938(昭和13) 年10月26日



大学紛争と明治学院礼拝堂(チャペル)



全学集会(1969年2月7日)

チャペル封鎖(1968年12月8日)

(小説に描かれた大学紛争)　太田治子(太宰治の娘)「私のハムレット」(1972年『新潮』)

掲載写真、明治学院百五十年史より転載

明治学院礼拝堂(チャペル)

■チャペル封鎖～クリスチャン学生が問うたキリスト教主義教育

明治学院新聞　第228号　1969年1月15日号

る。又、この二つのバリケード封鎖は我々に現体制に於ける大学機構の矛盾した現実を警察との結託、盗聴テープ、使途不明金という厳然とした証拠品によって垣間見たのである。盲にされていた我々学生の目に初めて明確に写ったこの現実を、さらに我々の手で大学当局のベールを剥ぎ取り、その責任を厳しく追求しなければならないという自覚が失われそれが十一月二十一日の第二次本館バリケード封鎖、六号館自主管理という大衆的な闘争を組み得たのであろう。さらに十二月八日に我々は自治権奪還闘争の質的エスカレーションとしてチャペルをバリケードで完全封鎖した。

我々はそれまで全学共闘会議に結集していたが、チャペルをバリケード完全封鎖するといった行動の位置付けに意見の相違があったため、新たに"闘うキリスト者同盟"を組織し、全学共斗会議の諸君の支援のもとにチャペルにバリケードを構築した。これは二ヵ月間の斗いで明治学院のキリスト教が学校の企業経営の矛盾を隠蔽する役割をするまでに空洞化し切っていた事に対する抗議と平然と人間不在のキリスト教を語る大学当局に対する根底的な否を凝固させたものであり、同時に明学に凝縮されるが如く社会に背を向けたキリスト教への反逆を意味するのである。われわれはこれ等の総括を踏えた上で真に大学の再建を思考してゆかねばならない。

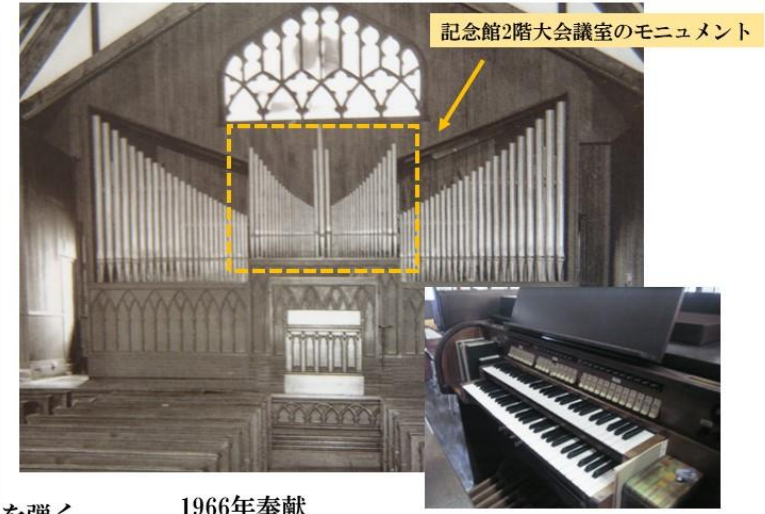
一月八日、授業開始の第一日目に教務部より後期の試験、六五年度の卒業試験に関する対処が発表された。上智大学に機動隊が入った事を考えても我々は大学当局へ気を許すことはできない。十四日に大学当局がいかなる対応に出るのか分からないが我々の捉えている三ヵ月間の重みと入学阻止を目前にした緊張感を、無視し、過去と同様な形で安易に「言葉の拒否」を行うなら、我々には、もはや明治学院大学を全学バリケード封鎖する事によって抗議する以外にありえないのだ。

（一月十一日）

明治学院礼拝堂(チャペル)

■明治学院礼拝堂のオルガン　オルガンという楽器、キリスト教音楽、礼拝堂

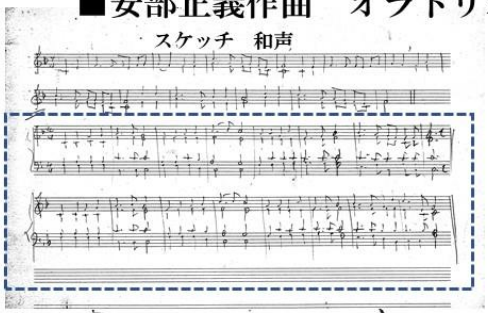
メイソン・ハムリン リードオルガンを弾く
安部正義（ご令孫　沖本まや氏提供）

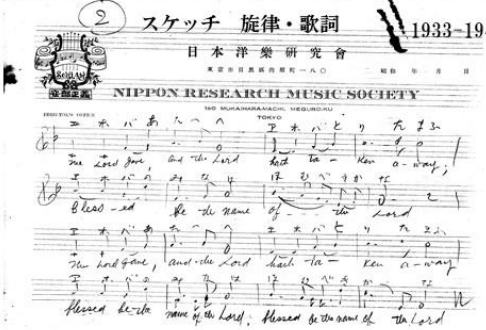


1966年奉献
西ドイツ･ヴァルカー社オルガン

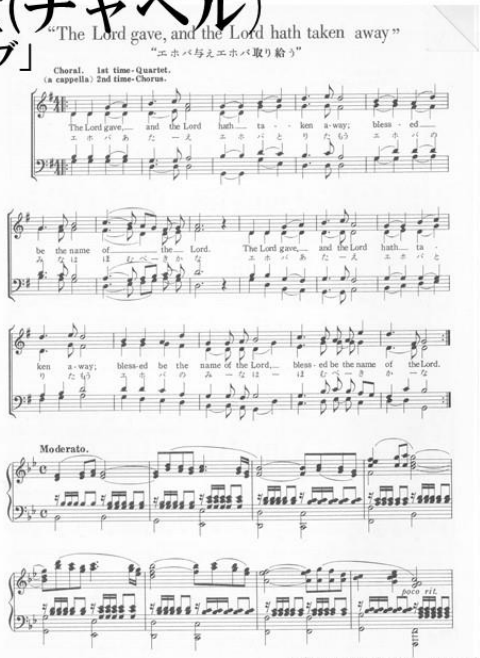
明治学院礼拝堂(チャペル)

■安部正義作曲　オラトリオ「ヨブ」





1933~1944頃?



安部正義　自筆譜　歴史資料館所蔵

ピアノ伴奏譜　1965年初版

明治学院記念館(旧神学部校舎兼図書館)

■島崎藤村

島崎藤村「櫻の實の熟する時」
初版 1919(大正８）年1月　春陽堂より刊行

英吉利の詩人が以太利へ遊んだ時、ベニスの町で年頃な娘をもった家の母親はあの美貌で放縦な人を見せまいとして窓を閉めたというではないか。それにしても、万物を悲観するようなバイロンの詩がどうしてこう自分の心を魅するだろう。あの魅力は何だろう。仮令彼の操行は牧師達の顔を渋めるほど汚れたものであるにもせよ、あの芸術が美しくないとはどうして言えよう。

こうまた考えない訳にいかなかった。

捨吉にはもう一つ足の向く窓がある。新しく構内に出来た赤煉瓦の建物は、一部は神学部の教室で、一部は学校の図書館に成っていた。まだペンキの香のする階段を上って行って二階の部屋へ出ると、そこに沢山並べた書架がある。一段高いところに書籍の掛りも居る。時には歴史科を受持つ頭の禿げた亜米利加人の教授が主任のライブラリアン*として見廻りに来る。書架で囲われた明るい窓のところには小さな机が置いてある。そこへも捨吉は好きな書籍を借りて行って腰掛けた。

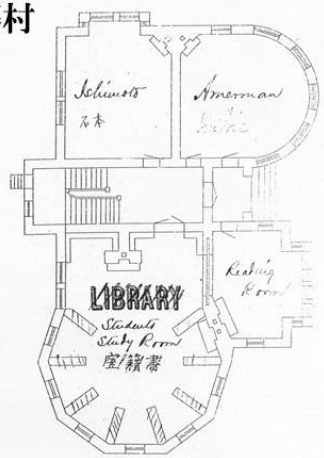
寄宿舎から見るとは方角の違った学校の構内のさまがその窓の外にあった。一日は一日と変って行く秋の空がそこから見えた。

窓の日あたりを眺めていると、捨吉の心は田辺の小父さんの方へ行った。どうかして捨吉の気を引立てようとしている小父さんが「貴様も見よ」と言って案内してくれ

捨吉：島崎藤村のこと
（新潮文庫版より）

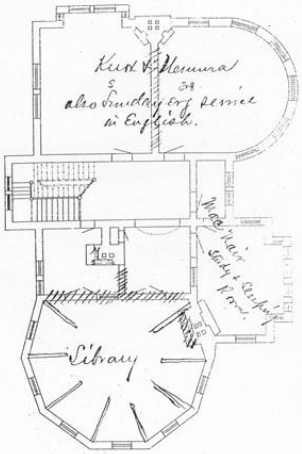
明治学院記念館(旧神学部校舎兼図書館)

■島崎藤村



FIRST FLOOR

面　圖　下　階



SECOND FLOOR

面　圖　上　階

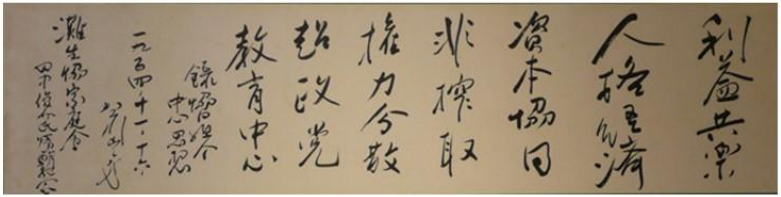
附図1．創建時の平面図

当初の設計では1階　現:小チャペルが図書館になると想定されていたが、宣教師アメルマンによって2階に図書館を移す設計変更がされたとされる。

明治学院記念館(旧神学部校舎兼図書館)

■賀川豊彦

〔賀川豊彦が説いた協働組合の中心思想〕

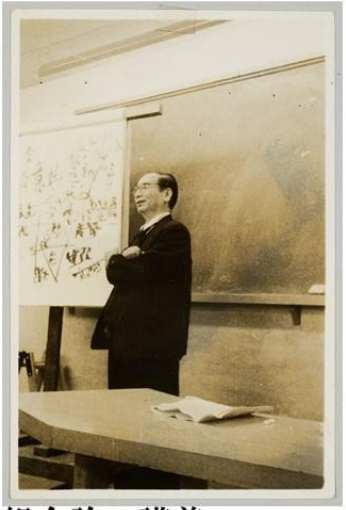


https://www.kobe.coop.or.jp/about/toyohiko/extent.php　より

〔賀川豊彦とノーベル賞〕

1947年と48年にはノーベル文学賞の候補に、1954年から56年にかけてはノーベル平和賞の候補者として推薦されていた。

■賀川豊彦　明治学院大学教授としての賀川豊彦



1949年より1960年まで明治学院大学教授
1951年、1953年から1957年まで協同組合論を担当
1955年から1957年まで経済心理学を担当

明治学院消費生活協同組合＝明治学院生協は、賀川の協同組組合論の講義を受けた学生たちが、影響うけて学内に生協を立ち上げること活動を行い、1959年に生協が誕生した。

島崎藤村と賀川豊彦　世間を大いに騒がす!?

島崎藤村『新生』1919年　春陽堂
姪の島崎こま子と関係を持った～近親相姦を題材にした自身の実話小説。
1955年初夏、こま子が研究者の伊東一夫と対面した時、「最初は叔父を怨み憎んでもおりましたが、だんだん年をとるにつれ、そのような気持はなくなってきました。むしろ今は、あのように、文学作品によって自己を貫いてきた叔父に尊敬をもつようになりました。叔父は世間で噂するようなひどいエゴイストではありません。思いやり深いところもたくさんありました」と話し、自身が必ずしも作品の犠牲になったとは思っておらず、作品が叔父との共同制作だったとも述べたという。

賀川豊彦『貧民心理之研究』1915年　警醒社
約4 年8 ヶ月に及ぶ神戸新川のスラムでの生活に基づいて執筆されたものであり、その実像に迫る貧困問題研究の書物～賀川最初の学術書。
現代から見て明らかに誤った認識、部落問題に対する差別的記述がみられ、その独断と差別的偏見が批判される。賀川理解･評価の議論にあたってクローズアップされる著作。全集刊行にあたって、大きな議論を巻き起こすことになる。
賀川は「差別者」だったか、差別表現は「若気のあやまち」（武藤富男）だったのか･･･。

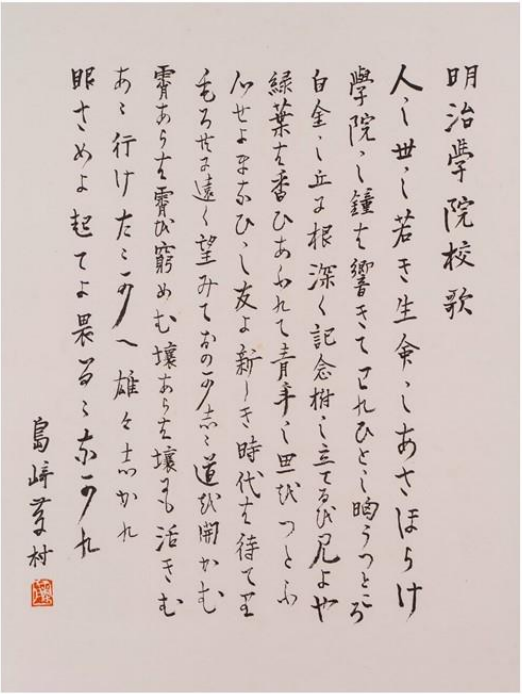
明治学院校歌

（読み）

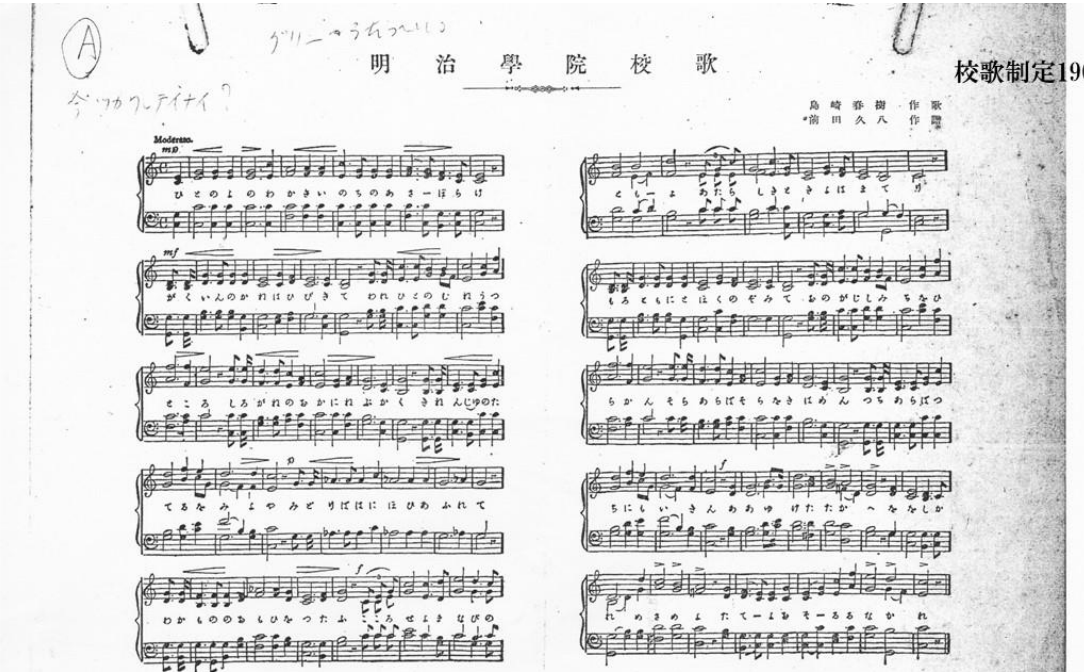
生命（いのち）、あさぼらけ（あさぼらけ）、白金（しろかね）、緑葉（みどりは）、香ひ（にほひ）、青年（わかもの）、まなひ（まなび）、おのかしし（おのがじゝ）、霄（そら）、壤（つち）、起て（たて）、畏る（おそる）

（行わけ）

人の世の若き生命のあさぼらけ
学院の鐘は響きてわれひとの胸うつところ
白金の丘に根深く記念樹の立てるを見よや
緑葉は香ひあふれて青年の思をつたふ
心せよまなひの友よ新しき時代は待てり
もろ共に遠く望みておのかしし道を開かむ
霄あらは霄を窮めむ壤にも活きむ
あゝ行けたゝかへ雄々しかれ
眼さめよ起てよ畏るゝなかれ



現在は筑摩書房版「藤村全集」（全6巻）に所収に示されたように17行に分けて記載され、学院校歌譜〔印刷譜〕の行わけもこれに準じている。
大正12年頃は、上記の行わけを3部に分け、初3行、中4行、終2行で記していたようである。



明治學院校歌

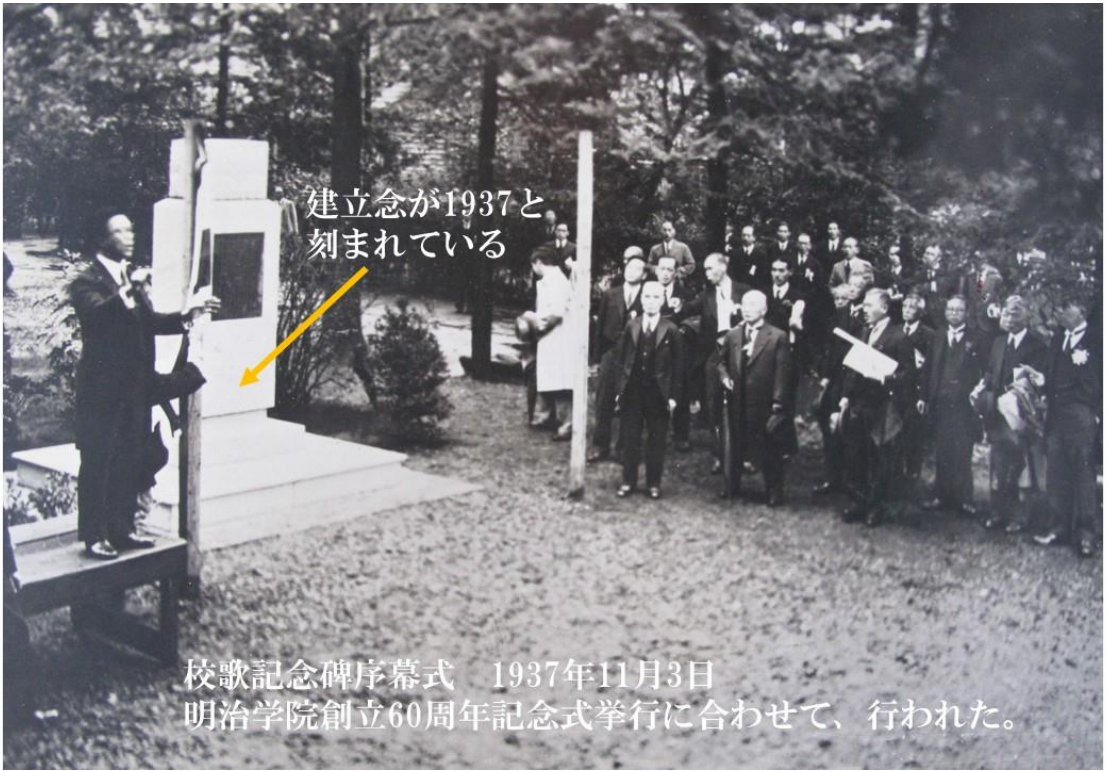
校歌制定1907年

島崎藤樹 作歌
前田久八 作曲

Moderato.

ひとのよのわかきいのちのあさーぼらけ
がくいんのかれはひびきてわれひとのじれうつ
ところしろがれのゐかにれぶがくきれんじゆのた
てるなみよやみどりばはにほひあふれて
わかいのゐしひなつたふ〻ろせよきなびの
とこーよあたらしきときよはまてり
もろともにさほくのぞみてゐのがじしみちなひ
らかんそちあらばそらなきはめんつちあらばつ
ちにしいきんあゆけたたかへなかしか
れめさめよたてーよゐそーるるなかれ

1923年4月　中学部に入学した平林武雄が手にした校歌譜　印刷譜として最古？　歴史資料館は複写物を所蔵。前田久八は旋律のみの作曲で、和声を付けたのは別の人物とされている。和声、調性も相違版がある。



校歌記念碑序幕式　1937年11月3日
明治学院創立60周年記念式挙行に合わせて、行われた。

文化財とは

文化財は，我が国の長い歴史の中で生まれ，はぐくまれ，今日まで守り伝えられてきた貴重な国民的財産です。このため国は，文化財保護法に基づき重要なものを国宝，重要文化財，史跡，名勝，天然記念物等として指定，選定，登録し，現状変更や輸出などについて一定の制限を課す一方，保存修理や防災施設の設置，史跡等の公有化等に対し補助を行うことにより，文化財の保存を図っています。また，文化財の公開施設の整備に対し補助を行ったり，展覧会などによる文化財の鑑賞機会の拡大を図ったりするなど文化財の活用のための措置も講じています。

（文化庁のHPより　http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/　）

明治学院近隣にあるほかの事例

□港区立郷土資料館　　旧公衆衛生院（白金台）

□東京都庭園美術館本館　旧朝香宮邸（目黒）東京都指定有形文化財